

私はこう 考える

「規範意識」
って
何だろう？

冒険遊び場の規範意識

宮里和則
(プレイヤー)

規範意識とは何だろう。規範は誰のための規範なのだろうか。NPO法人「日本冒険遊び場づくり協会」理事の天野秀昭氏は、子どもは「あぶない・きたない・うるさい」存在だと言う。この存在をそのまま受け入れることの大切さを主張している。

もし、この「あぶない・きたない・うるさい」を正そうとする行為が規範であるなら、冒険遊び場はそこから最も遠い場所であるように思える。冒険遊び場は「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに、通常では禁止されているたき火や木登り、穴掘りなどできる遊び場である。泥んこになり、はしゃぎ回る子どもたちであふれている。規範が否定形ではな

く肯定形で語られ、生きていくためのあり方であるなら、ここにも確かに規範意識は存在する。

ハンモックに立ってもいいですか

私たちの遊び場の片隅にはいつもハンモックが吊るされている。のんびりと船ごっこをしてみたり、激しくブランコのように揺らし、落ちてみたり……いつも子どもたちは、ハンモックでも自由に思い思いの遊びを楽しんでいる。

ある日のこと、このハンモックで遊んでいる五年生女子グループがあった。激しく揺らしては、大きな歓声が上がっていた。初めてのメンバーもいたの

宮里和則（みやさとかずのり）

NPO法人「ふれあいの家—おばちゃんち」のおじちゃんとして、品川宿のまちづくりにかかわっている。日本ダンゴムシ協会主宰。

で、私は様子を見ようと近づいていった。するとハンモックに座りながら五年生の女の子が真剣な顔で私に話しかけてきた。

「あの、このハンモックに立つてもいいですか？」

こう尋ねられたら皆さんだったらどう答えるだろうか。ここは自分の責任で自由に遊ぶ公園。ルールをできる限り無くし、子どもたちのやりたい気持ちに応援する場所である。しかし彼女は「その場のルールがわからなければ責任者に聞く」という思いをしつかり持っていたのだろう。ルールは自分ではない誰かが決めるものと考えている。これが彼女の規範意識である。

北浜ことも冒険ひろばによく来ている子どもたちは顔を見合わせていた。私も久しく遊び場のルールを聞かれたことがなかったの、一瞬言葉を失ってしまった。「それは自分で決めていいんだよ」と答えると彼女は「じゃあ、やめます……」とあっさり思いを抑えてしまった。本当は立ってみたかったのだろう。私がいいよと言ったら立ったのだろうか。

今、子どもの周りには責任ある大人ばかりがいる。例えば、子どもが学校や幼稚園で木から落ちた時は、保護者へまず謝罪の電話をしなければならぬ。責任者が目を離していたからということになる。だから責任者が責任を問われないようにルールを決める。木には登ってはいけません。しかし、もし町中で木から落ちた子どもを通りがかかりのおじさんを見つけ、家に送っていったとしたら、保護者はどんな対応をするだろうか。もちろん感謝の気持ちを表すだろう。「ごめんなさい」の関係と「ありがとう」の関係。いつの間にか子どもの周りには「ごめんなさい」の関係ばかりが取り巻いているようになった。

責任のある大人に聞いて許可されれば、いつも安全を保障されているように思えてしまう。しかしこの思いで育ってしまったえば、自分の身を自分で守るといったとても大切な感覚が実は失われてしまう。

自分の責任者はいつの時代も自分。ちよつと考えてみれば「自分の責任で自由に遊ぶ」ことはあたりまえの感覚だったはずである。

穴掘り

日君は泥遊びが大好きだ。穴を掘り、落とし穴。水を入れ、池ができ、やがて川になる。そしていつの間にか頭も顔も服も靴も泥だらけになってしまう。家に帰ればもちろん叱られる。それでも次に来た時もまたドロドロに……。お母さんは譲歩して条件を出す。「泥遊びはいいけど、靴は汚さないでね」

それでもやはり泥だらけ。やがて彼は、自分の靴は自分で洗うようになり、北浜に替えの靴を持ってくるようになった。お母さんの思いと彼の思いのせめぎ合いの中で、彼の規範意識が鍛えられていく。彼の規範意識の主人公は彼自身である。これが本当の規範意識ではないかと私は思う。

大人の規範意識

この公園にいと大人の規範意識も揺さぶられる。北浜こども冒険ひろばは人通りの多い公園である。子どもたちがたき火をしたり泥んこ遊びをしている

場所を、遊び場とは関係のない人たちが始終横切っていく。スーツ姿のビジネスマン。ショッピンバッグを押したおばあさん。ハイヒールのお姉さん。ここは町の人たちの生活道路（抜け道）なのだ。

子どもたちが自由に遊ぶ場所としては制限が多いように思われる。私も当初はそう感じていたが今はそれが魅力の一つなのだと感じるようになった。それは普通では子どもの遊び場に来ないような人たちとも、たくさんの出会いをもたらししてくれたからだ。

ドラム缶風呂の日々

夏。蝉時雨。子どもたちはドラム缶風呂に夢中。毎日風呂たきをやりに訪れる六年生。水着を持ってきてにぎやかに入る子どもたち。まさに北浜が温泉地になってしまふ。普段は公園をただ通り過ぎるだけの人たちも、このドラム缶風呂に引き寄せられるように、近づいてきておしゃべりをしていく。

「懐かしいわね……」「これ熱くないの？……」「「いっつも楽しそうなことしているねえ」「おじさんも入り



▲新聞紙なしの火おこし

たいなあ」。みんなすてきな笑顔で子どもたちを見ながら話してくれる。「六十五年前に入りましたよ。この町にも九つぐらいあったんですよ」と普段は無口なおじいさんがうれしそうにこの町の昔を語ってくれることもあった。

ある日のこと、道行く人にいつものようにあいさつをしていると、「え、こんなことしていいの？」といぶかしげに近づいてきたおじいさんがいた。「公園で火をたいてもいいの？」そう、通常の公園では禁止されているたき火である。おじいさんの疑問はもつと

もだ。おじいさんは「公園では、たき火をしてはいけない」という規範意識を持っていてる。

「ええ、そうなんですよ。

この公園は子どもたちが自分の責任で自由に遊ぶことができる公園を作ろうと区が整備したんです。

子どもたちがたき火もできる公園なんですよ」と話すと、「ああそうだったんだ。いつもここを通っていて不思議に思っていたんだよ」とおじいさんは深くうなずき、火おこしをしている子どもをしげしげと眺めた。これは子どもの理解者を増やすチャンスと感じ、しばらく話し込もうと思った。

「子どもの火遊びで火事になるニュースが多いじゃないですか。それは隠れてやるからなんですよね。大人と子どもが火を挟んで向き合うことがとても大切なんだと思うんですね」「そうだね、大切なことだね。今はどこでもできないからね」と話が進んでいった。にこやかに帰っていくおじいさんの後ろ姿を見ながら、「たき火はダメ」から「大人と一緒に子どもはたき火をするべき」へと規範意識が大きく広がっていったことを感じた。

北浜こども冒険ひろばは人通りが魅力である。町の人の生活のすぐそばに、子どもの遊びがある。そのことで、町の人たちの規範意識が少しずつ、それでも確実に変わっていることを感じる日々である。